

ぐるっと東北

切り替えの速さを習得

新政酒造社長 佐藤祐輔さん =1992年度卒

母校を
たずねる

1990.5.22

県立秋田高 ⑥

秋田市の「新政酒造」の佐藤祐輔社長(43)は1992年度卒。革新的な酒造りをしています。県産米のみを用いるなど原料や製造方法にこだわります。その背景には高校時代にいくつも挫折を経験し、「これが駄目なら次へ進む」というスタイルが確立されたからといえます。

【森口沙織】

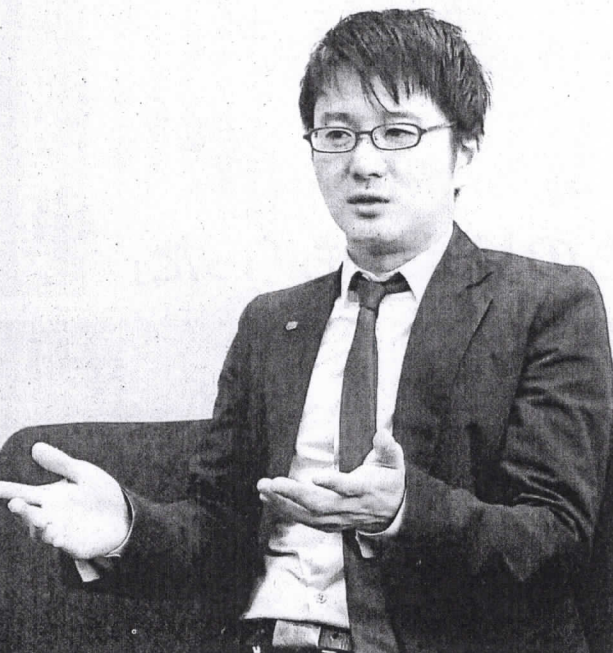
秋田高へ進んだのは自然な流れでした。幼稚園から中学まで秋田大の付属に通っていて、秋田高へは多くの友人が進学しました。中学時代はテニス部で、勉強の成績も良かったので「そつなく何でもできる」と自負していました。

でも高校に入ると、成績が落ちました。授業の前半30分くらいしか集中力が続かなくて。いつの間にか寝てしまっている。後に発達障害のひとつ、注意欠陥障害(ADD)の影響だったと分かりました。自分がコントロールできなくて、当時は原因が分からず、自分をコントロールできなくて、とても苦労しました。高2のときには、ついに全科目でクラス最下位になってしまったのです。

スポーツも駄目でした。高1でポート部に入りましたが、体育会系の雰囲気合わなくて退部しました。次に小学校時代の経験を生かそうと、バスケットボール部に入部しました。だけど、ここでも全然歯が立たなかった。身長も足りないし、センスもなかった。練習で、どうこうなる問題じゃない。努力で埋められない差を、強烈に思い知らされました。それまで自分

を優等生だと思い込んでいたので、決定的な挫折でした。その後はまったのがロックミュージックです。洋楽のCDを買い集め、同じロック好きの仲間も増えました。ギターやベースも演奏し、とにかくたくさん聞きましたね。好きな曲は歌詞を片っ端から暗記し、これが英語の勉強になりました。好きなことなら集中できるよと分かったんです。

それと「やってみて駄目なら、次のことに取り組み」という切り替えの速さが次第に身に着いたと思います。これはその後、大学を入り直したり、フリーライターから実家の酒造りを継いだりした決断にも通じています。そうやって自分に合うものを見つけていく。「トライ・アンド・エラー」の繰り返しです。日本酒については当初、ラ



さとう・ゆうすけ 1974年秋田市生まれ。明治大を中退し、東京大文学部に入学。卒業後、ウェブ新聞社勤務やフリーライターなどを経て、2007年、実家の「新政酒造」(1852年創業)に入社。きっかけは静岡県の蔵元が製造した日本酒に感銘を受けたからという。現在8代目社長。自社で田んぼを所有し、無農薬での栽培を進めている。

「三大行事」熱く盛り上がり

秋田高には「秋高三大行事」と呼ばれる催しがある。「運動会」(4月)、「秋高祭」(主に7月)、「学級対抗」(8月)で、春から夏にかけて学内が熱く盛り上がる。運動会は入学間もない1年生が上級生と交流する機会を兼ねている。秋高祭は2日間わたる文化祭で、学級対抗はサッカーや野球などのスポーツ大会だ。それぞれ、生徒たちが各行事の企画段階から主体的に取り組んでいる。

騎馬戦で一致団結する生徒たち—秋田市で



その際、生徒会に設置される「行事企画管理室」が旗振り役となり、数カ月かけて企画を練る。開催の1週間ほど前には「合同企画委員会」を開き、教諭らと協議しながら詳細を詰めていく。今年の運動会は4月19日、秋田市の八橋運動公園で開かれた。それぞれの学年が四つのチームに分かれ、得点を競った。100メートル走やリレーといったトラック競技に加え、騎馬戦や棒倒しなどのプログラムがある。生徒たちは陣を組んだり応援歌を熱唱したりして士気を高め、結束を強めていた。

運営のトップ、行事企画管理室長の樋口美枝さん(3年)は「生徒全員が全力で参加できるように、昨年から準備してきました。授業だけでは得られない経験ができて幸せです」と話す。【山本康介】次回回は29日に掲載

イターの「ネタ」としての興味でしたが、勉強するうちに実際に造りたくなりました。それで家業を継いだのです。ここも切り替えの速さですね。ライターは天職と思えるほど楽しかったのですが、酒造りが駄目だったら、また戻ればいいやと思っていました。でも、うまくいくのでは、という手心えはありました。原料や製法にこだわり、飲んだ人に感動してもらいたい。今はそこを目指しています。高校時代は、自分らしさを最も発揮できなかった時間でも腐らずに過ごせたのは、個人的な同級生と先生に囲まれたからだと思いません。思えば、自分自身の「取扱説明書」を作成する時間だったのです。